

ヴィリエ・ド・リラダンにおける愛

— 幻想とその至高性 —

平 山 規 義

ヴィリエ・ド・リラダン（以下ヴィリエと略記）の諸作品において、愛は最も重要なテーマのひとつである。この小論ではヴィリエが描いた愛を通して、彼における人間精神と現実世界との究極的な関係について考察してゆくことにしよう。

1. 内なる女性

男女の恋愛をアツかったヴィリエの作品の物語において、愛する主体とその対象である他者との出会いは、ほとんどパターン化されていると言っても過言ではない。それは、いわば「雷の一撃」のような決定的な瞬間なのである。『残酷物語』の中の『ヴェラ』と『未知の女』という短篇について見てみよう。

はじめて彼女に会ったのは外国で、ある大使館の舞踏会のときではなかったか？……そう、あの瞬間が、眼の前にまざまざと蘇ってきた。そこに彼女が輝かしい姿を現わしていた。あの夜、二人の眼ざしは出会った。そして二人はおなじ性質であり、永遠に愛し合うはずであることを、心の奥深く認め合ったのである。（…）社交界の人々が作り出すあらゆる障害は、その瞬間、二人がたがいに抱いた静かな確信の前に、たちまち消え失せてしまったのだった。¹⁾（以下傍点は引用者）

熱狂に我を忘れて、この靈感に打たれた芸術家に拍手を送っていたとき、突然その手ははたと宙に停った。彼はそのまま身じろぎもしなかった。

とある棧敷のバルコンに世にも美しい若い女が今姿を現わしたのである。

(…) たまたま、彼女は何ごころなく、群衆の方へとひとみをめぐらしたのであった。この瞬間、青年の眼と女の眼とは見交された。輝きかつ消ゆる、一瞬時であった。(…) そう、この一瞥によって、二人は、この時永久に、二人の生命が始まったのは搖籃の時からではないということを悟ったからである。²⁾

このように、愛する主体は一瞬のうちに、しかも全的に愛の対象との出会いを果すことになる。しかし、このような愛の誕生は、まったくの無から有が生じるような出来事ではない。ヴィリエにおいて愛は、まず人間精神の奥底いわば無意識の中に眠っている、手つかずの純潔な状態で存在するものである。それはある可能性をもったひとつの価値にはかならない。この処女性をそなえた、無意識の状態にある可能性、つまり愛は、人間精神が持ちうる想像力に応じて、無限の広がりを展開することができる。つまり、十分に崇高な精神の持ち主であれば、そのイマジネーションによって、可能性を秘めた価値である愛を、神聖なアイデアにまで高めることもできるのである。

そして、愛は常にその対象を必要とし、愛する主体はその愛を実現しようとする。つまり愛は、愛される存在である他者の中へ投影されなければならない。ヴィリエにおいて愛する主体は、その精神の中に想像力によって培われた純潔なイマージュとしての元型を抱いており、それは言い換えれば、主体内面の生成物であるアニマに相当するものである。³⁾ 愛する主体がその現実の愛の対象の中に実現しようとしているのは、このアニマという主体自身の一部にはかならない。そして、主体が選択する愛の対象は、主体が無意識のうちにその精神の中に抱いているこの元型としてのアニマに限りなく近い現実の対象となることが運命づけられている。この内面の元型が、理想的な現実の対象との出会いによって、崇高な愛として開花するこの瞬間、それこそが冒頭で引用したヴィリエにおける愛の特権的瞬間なのである。

2. <触媒>としての他者

純粹に無垢な状態において崇高な精神の中に眠る愛は、外的な事象の力によって限界を設けられることもなく、至高の絶対的な価値を持つことさえ可能である。しかしそれはまだ眠ったままの潜在的な愛である。この愛は、人間の外

的な現実世界との接触によって、人格として顕在化されなければならない。

前節で見たように、愛する主体が現実の愛の対象の中に求めようとするのは、彼が無意識の中で夢想し、理想化した女性という想像物、即ち主体内面のイメージなのである。この時、愛される対象である現実の他者とは、愛する者が形づくる理想像に一致する限りにおいてのみ、その存在理由を持ちうることになる。『未来のイヴ』の中で、理想の女性としての人造人間アダリーが、エワルド卿に対して、彼と彼のかつての愛人アリシアとの愛について、次のように述べる場面がある。

あなたがあの女の中で愛していらっしゃるもの、そしてあなたにとってそれだけが、その実在であるものは、その通りすがりの女性のうちに現われているものではなくて、実はあなたの「願望」の実体なのです。⁴⁾

このように、他者の中に見出された、愛する主体の願望の投影されたイメージのみが、その主体にとって真実と見なされる部分であり、他者における真に他者なる部分は、愛する主体によって捨象され、拒絶されることになる。とすると、ヴィリエの描く愛において、欲望される現実の対象のもつ役割とは何なのであろうか。それは、愛される対象が現実世界に曝している外面的人格（容貌の美しさなど）によって、愛する者の精神の中に潜在的に眠っている理想化された愛の原初のイメージをめざめさせる、いわば〈触媒〉としての役割である。つまり、その主体の中にある「内なる女性像（アニマ）」が、この触媒作用によって現実化されるわけだ。だがこの顕在化された理想の女性も愛する者がその対象の中に投影したものに過ぎず、愛される対象そのものではないことは先にも述べた。しかしこの場合、愛された現実の存在としての人間は、この愛する者の精神の作用に積極的に加担しようとはせず、冷やかな態度を示す。『イニス』の中の次の一節を見てみよう。

彼が愛するものは、この私、あるがままの私ではなく、私が彼にそう見える、彼の思考の人物であろう（…）したがって、私を手に入れたと思いついていても、事実上彼は私にさわりさえもしていないことになろう。（…）彼ら（恋する者たち）はその神秘的な恋愛において、おのれ自身から脱け出ることができない。⁵⁾

また『未来のイヴ』においては、エジソンによって造られた人造人間アダラーは、ロボットゆえに愛することを拒むエワルド卿を説得し、彼の理想の女性像を意志の力によつて自分自身の機械のからだに投影させようとするのである。

しかし、これは愛が持っている避けることのできない残酷な宿命であるとも言えよう。「いかなる人間もおのれ自身から逃れ出ることにはできない」というのが、ヴィリエの多くの作品の中に見られる主張である。ヴィリエにおいては愛し合う男女は、意志的な想像力による夢想によって、二つの存在が融合するという一体感を感じることはない。二つの存在はあくまでお互いに他者であり続けなければならない。二人のうち一方は、他者がその愛の原初の瞬間において抱いたイマージュのままであり続けるだろう。また一方は、自らの外面的人格によって他方の精神の中にめざめさせた凝結したイマージュのままであり続けることになるだろう。その点においてヴィリエが『未来のイヴ』の中でエジソンに語らせる次の言葉は決定的である。

恋をする人たちはどうかと申せば、お互いに識り合ったとただ単にそう思い込むやいなや、それ以後はもうお互いに習慣だけで結ばれていくようになります。彼らはお互いの心に染み込んだ彼らの存在と彼らの総体に執着するのです。永遠に赤の他人である恋人同志は、銘々が相手をもとにしておのれが心に抱いた亡霊に執着するのです。⁶⁾

3. 愛の〈神性〉

ところで、ヴィリエの諸作品に登場する情熱的に愛する者たちはどうしてこのように、彼らのうちにめざめた原初の愛のイマージュよりも美しい、高次なイマージュを新たに自らに創り出そうとしないのであろうか。それは、ヴィリエにおいて愛とは、唯一無二の絶対的価値を持つものとして規定されているからである。ヴィリエにおいて本質的な愛は、その原初の瞬間において一瞬のうちに全的に与えられるものだということはすでに述べたが、ここでは、ヴィリエ的な愛のあり方のもうひとつの特性について見てみよう。ここで問題となるのは愛の〈単一性〉ということである。『未来のイヴ』の中でエワルド卿は次のように語る。

私の家門では、最初のもの（愛）は、ほとんど常に最後のもの、つまり唯一のものなのです。⁷⁾

そして『エレン』の中では、アンドレアスは次のように語る。

私は一度だけしか愛することのできない人々の一人なのです。⁸⁾

つまり、愛とは散逸させてはならない至宝のようなものであり、複数の対象に分散させてはならない、ひとつが全てであるような分割不可能なものなのである。従って、ヴィリエにとって、その原初の瞬間に開花した全的な真の愛とは、排他的であり唯一の愛ということにもなる。この絶対唯一の愛とは、崇高な精神をもった人間にだけ許されるものであり、ある種の絶対的真理を渴望する精神を満足させることができるということになる。『アクセル』において主人公アクセルは次のように語る。

君は、男女の婚姻による愛——そうだ、愛の名に価する唯一の愛に対するわが信仰の健全なる幻想を嘲弄した。⁹⁾

すなわち、神聖な、ある宗教的な力によって神にささげられた愛こそが、唯一愛の名にふさわしいものと見なされる。アンリ・パールはこの点においてその著書『象徴主義とは何か』や『象徴主義文学』の中で、ヴィリエをボードレールやマラルメなどの象徴主義の詩人たちと区別している。つまり詩人の直観と想像力によって、象徴を通じて感覚世界から不可視の世界へと入り込む詩的冒険を試みる象徴派の詩人たちに対して、ヴィリエは、「宗教的な超越真理を想定し、哲学的理論の展開によってある種の神的なものへと到達しようとしている」と指摘する。¹⁰⁾

このように、ヴィリエにおける愛がある神的な価値を持っていることは明らかだ。〈神性〉とは、絶対唯一のものの中にしか許されない価値のほずである。ところでもし、愛の原初の瞬間において、我々がこの〈神性〉を体験することができたならば、〈神性〉はこの原初の瞬間のイメージと分ち難く結びつきそのイメージそのものと同一視されることになる。この愛の最初の瞬間を幾

度も想起し反復することは、新たなイメージをもたらしはするが、それは原初のイメージに似せてつくられた単なる複製にすぎず、決して同一のものではありえない。愛する主体において最初の愛が実現されたときにその神性を得ることができれば、その後に見られるいかなる新たなイメージも、あの原初の瞬間のイメージを弱め、ひいては否定さえしてしまうことにもなる。不完全な神（絶対）などというものがありえないように、ヴィリエにおいては不完全な愛というものはあってはならない。愛が完璧なのは、愛の原初のイメージにおいてであり、現実化される過程において愛は不完全なものとならざるをえない。

恋愛の唯一無二の時間、この上もなく美しい時間、例えばお互いの愛の告白が最初の口づけの閃光のかけに消え失せるというような時間を永遠化すること。ああそれを飛翔の途中で止め、それを固定し、自己をその中に限ってしまうこと。おのれの精神と最後の願望とをそこに化身させること。これこそ全人類の夢ではないでしょうか。その後が続く時間が色々な変化や衰退をもたらしても、なおかつ人が愛し続けようとするのは、この理想の時間を今一度取り返そうとする試みにすぎないのです。（…）他の時間が楽しいにしても、それはただこの時間を引き延ばし、この時間を思い出させる場合に限るのです。（…）この単調な、そして高貴な時間を、愛の対象も不断に取り返そうとするこの失われた時間、よみがえらせようとしてむなしく熱狂するこの逝ける時間の表象にすぎなくなってしまうのです。他の時間はすべてこの黄金の時間の刻印をつけて打ち出した貨幣にすぎません。¹¹⁾

このように『未来のイヴ』においてエジソンが語る言葉の中にあるものこそヴィリエが愛に対して抱いている夢なのである。

4. 愛と崩壊の時間

前章で少し触れたことだが、ひとたび実現された愛は、現実の時間の流れの中でその侵食作用のために、その価値を失うことになってしまう。ヴィリエにとって現実世界の時間とは、本来その本質において分割することのできないものを細かく分割してしまうものとして規定されている。ヴィリエにとって、愛

とは持続するものではなく、ある瞬間に爆発的に存在するものなのである。現実の生の中で愛を引き延ばすことは、結局愛を無に帰してしまうことになる。

恋人同志の間では新しい局面は何によらず必ず魅惑を減らし、情熱を害い、夢を吹き飛ばしてしまうものです。恋人同士がお互いに相手の気に入ろうとして身を飾っていた人工的なヴェールを脱ぎ棄てたつもりになると、忽然として飽満状態が生じて来るのはそういうわけなのです。この場合まだ彼らの確認するものはおのれの抱いて来た夢との差異にすぎません、¹²⁾そしてこの差異だけでも彼らがしばしば嫌悪や憎悪に到達するに充分なのです。(…)なぜなら、もし人が自分にこうだというたったひとつの考えに歓びを見出した場合、心の底で望んでいることは、その考え方を少しも曇らせず、あるがままに増しも減らしもせずに保ち続けたいということだからです。(…)したがって、我々に幻滅の悲哀を味わせるものは、新しさにほかならないのです。

このように代弁者エジソンの言葉を通して我々は、ヴィリエの、時間に対する否定的な態度を見出すことができる。

5. 限界、死、そして永遠

ヴィリエにおける愛とは、二つの存在が融合することではなくて、決して触れ合うことさえないかもしれない二人の人間が、それぞれの精神の一部を一方通行に相互に投影し合うことなのはずでに述べた。が、このようにして現実界において得ることができた、瞬時のものではあるが至高の愛を、その本来の神的な価値や神聖な愛のイマージュを、この地上の現実世界で持ち続けようとすることは、ヴィリエにとってはもはや不可能なこととなってしまったのであろうか。イマジネーションによる純粋な愛は可能であろうか。我々はその解決を『こよなき恋』と題された作品の中に見ることができる。ある若い男がフィアンセを一人故郷に残して兵役にかり出されてゆく。彼は戦場で、彼女が心の底から彼の帰りを待っているという美しい幻想の中に日々を過す。しかしその時、実は彼女はよその男たちを相手に我が身を慰めていたのであった。この男の歓びは、純粋にイマジネーションの産物でしかないのだが、彼が戦場で抱く

幻想は、現実の愛の対象の不在によって、その幻滅は回避されることになる。

いわゆる実現された幸福なるものの、このような実証的結果ではなく、ただ事実上幸福であるように天命によって定められた人間として、彼の幸運の星は確乎として揺ぎなき希望と不在ゆえの幻と、日々によみがえって力をつけてくれる思い出によって織り成されたこの四年半の曇りなき至上の幸を以て、彼を満したのであった。¹³⁾

フィアンセの真の姿を知らぬまま男は異郷で死んでしまう。が、彼の若々しい崇高な愛は現実のもたらすであろう幻滅から守られることになる。

『アケディセルル』という作品の中には、もうひとつ別の完璧な愛の例が見られる。それはおそらく、ヴィリエの作品の中で最も絶対的な愛を描いたものだといえよう。純粹で汚れのない愛によって愛し合おうとしている二人の若い男女がいる。そこへあるひとりの年老いたバラモン教の僧正が、彼らの互いの情念をかき立てるために、二人を別々の牢の中にとじ込めて決定的に引き離してしまう。このバラモン僧は、二人を絶望の淵においやることによって情熱をかき立て、愛の力を生命そのものよりも強烈なものにする。そして、この愛の実現が彼らにとって致命的なものになるまで高めようとする。

ある歓喜の熾烈さは、その歓喜のために受けた絶望の大きさに比例することを神々の掟のひとつが望んだからである。したがってこのような場合にのみ、この歓喜は全靈魂を同時に捉えてこれを焼きつくし、これを絶滅し、そしてこれを解放し得るのだ。¹⁴⁾

バラモン僧はこのように覚悟、準備の整った二人を、唯一の瞬間に引き合わせる。愛の絶対的な完成のためには、これ以上の最良の場はほかにありえないだろう。この二人の若者は、おのれ自身の感情のあまりの強烈さによって、もはや自分自身の内なる愛以外の何も感じるができなくなってしまう。時間的な持続を望むべくもない唯一の瞬間において、彼ら二人は、互いに自らの愛そのものと化したのである。このような愛の熾烈さは間違いなく彼らの生命を消滅させてしまい、彼らを現実の生から解放してしまうことになる。このよ

うな絶対的な愛の成就の後には、現実の生はもはや何の役にも立たなくなるのである。

いまだに二人は、〈死〉が——必ずや彼らはこれを知らなかったに相違ない——その影をもって二人の存在を掠めつつ二人に襲いかかったその瞬間の姿態をそのまま失わずにいた。二人は意識を失って世にも奇怪な死を遂げ、(…)二つの本質を、生きとし生けるいかなる男女とも断じて経験したことのない、恋の唯一無二の刹那のうちに、深く深く沈みゆくにまかせたのである。¹⁵⁾

二人ながら永久に実現し得ぬものと信じていたこの稲妻を放つくちづけの内面的衝撃が、この二人の男女をはばたきのひとあおりでもって、その人生の外、彼ら自身の夢想の空へと拉致し去ったのである。そして必ずや彼ら二人にとって、刑罰とは、この比類なき刹那の後になおも生きながらえることであつたに相違ない。¹⁶⁾

このように、死によって固定されたこれらの神的価値を賦与された愛は、現実の世界の時間の流れから引き離され、神の時間である〈永遠〉の中で守護され保ち続けられるわけである。愛によって死んでしまったこの二人は、我々人間の精神が抱いている潜在的な愛を、その全体として、またその完璧さとして、具現化してみせたと言える。それはあくまで、二つの存在の融合ではないのであるが、単なる愛のイメージなどではなく、生命を持った人間には近づくことのできない愛の本質そのものにはかならない。

そしてこの二つの神秘的な彫像はただ、不滅の心のみ近づきうる逸楽の夢をこのようにして具象化していた。¹⁷⁾

6. 結びにかえて

『アケディセルル』において我々は、愛し合う二人が、その愛の激情の熾烈さゆえに無意志的に死へと至る場面にたちあつたのであるが、『アクセル』の結末では、主人公であるアクセルとサラは意志的に自らの命を絶つたことによって死の彼方に想定した絶対的な永遠の世界へと飛翔しようとする。彼らは愛の持っている本質的で神聖な壮麗さに満ちており、有限な存在としての人間を

規定している現実の生命という隔壁を自らとり払う。今や絶対的な世界とは死と同一視されるものとなった。ヴィリエにおいて死とは、生命の否定と同時に人間精神が本来そなえている至高の愛への渴望を満足させる永遠の空間にほかならない。

註

- ・ヴィリエ・ド・リラダンのテキストの引用は、*Œuvres Complètes de Villiers de l'Isle-Adam*, 11 vols. Mercure de France, 1914-1931.

(以下 *O. C.* と略記)

- ・本文中のテキストの引用は、斎藤磯雄氏の訳を参照させていただいた。

- 1) *Véra*, in *Contes Cruels*, *O. C.*, t.II, p. 24.
- 2) *L'Inconnue*, in *Contes Cruels*, *O. C.*, t.II, p. 313.
- 3) これはユング派の精神分析用語によれば、アニマ（男性の無意識の中にある理想の女性像）とアニムス（女性の無意識の中にある理想の男性像）と呼ばれるものに相当するであろう。この点についてはE・ユング『内なる異性—アニムスとアニマ』海鳴社、を参照されたい。
- 4) *L'Eve future*, *O. C.*, t.I, p. 135.
- 5) *Isis*, *O. C.*, t.IX, p. 214.
- 6) *L'Eve future*, *O. C.*, t.I, p. 260.
- 7) *Ibid.*, p. 54.
- 8) *Elèn*, *O. C.*, t.VIII, p. 219.
- 9) *Axël*, *O. C.*, t.IV, pp. 141-142.
- 10) Henri PEYRE, *Qu'est-ce que le symbolism?*, P. U. F. 1974. *La littérature symboliste*, Coll. «Que sais-je?», P. U. F. 1976. を参照されたい。

またペールは、このようなヴィリエの態度は「象徴派というよりもむしろロマン派、とりわけ高踏派のものであり、詩句の問題やイマージュと象徴による暗示手段の問題に一切無関心だったので、象徴主義に対してはほとんど影響を及ぼすことなく終わった」と指摘している。

- 11) *L'Eve future*, *O. C.*, t.I, pp. 262-263.

(12) *Ibid.*, pp. 260–261.

(13) *Le Meilleur Amour*, in *Propos d'au-delà*, O. C., t.XI, p. 43.

(14) *Akëdyssénil*, O. C., t.V, p. 276.

(15) *Ibid.*, p. 279.

(16) *Ibid.*, p. 280.

(17) *Ibid.*, p. 279.